

北海道アイヌの儀礼用冠について

—北海道大学植物園・博物館所蔵資料の検討—

大坂 拓

- 目次
- 1 はじめに
 - 2 先行研究の到達点と課題
 - 3 分類
 - 4 北大植物園・博物館所蔵資料関連記録の検討
 - 5 各分類群の地理的分布
 - 6 さいごに

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、儀礼用冠 (Ceremonial crowns)

1 はじめに

本稿では、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園⁽¹⁾に所蔵される、主に1870年代から1940年代に収集されたアイヌ民族の儀礼用冠⁽²⁾を対象として、属性の組合せに基づく分類案を提示する。また、資料の背景情報⁽³⁾を検討したうえで、各分類群の地理的分布を明らかにする。さらに分析の副次的成果として、北大植物園・博物館収蔵資料に地理的「空白」の存在を指摘し、その背景に予察をおこなう。

儀礼用冠は、刺繍衣、陣羽織、儀礼用刀剣とともにアイヌ民族男性の盛装として用いられるもので、人間の祈りを補佐する機能を有すると考えられており（久保寺 1953；北原 2012b）、現在も盛んに製作され、各種儀礼や伝統舞踊公演などの場面で着用されている。

一方、各地の博物館等に所蔵される儀礼用冠は、その多くが他のアイヌ民族資料と同様に収集地・収集年などの背景情報を欠いている（付表）。地域差を踏まえたアイヌ民具の記述をおこなうためには、背景情報を有する資料を基盤とした基礎的な分類の提示が緊急性の高い課題といえる。

2 先行研究の到達点と課題

儀礼用冠に関する先行研究では、先端部に取り付けられた動物形木製品の地域差や、動物形木製品と信仰の関係に対して様々な推論が提示されきたが、形態の差異に着目した研究は少ない。

初期の研究として、John Batchelorは1926年に、儀礼用冠が比較的若い男性が用いるinauruと、より重要な位置にある男性が用いるekashpa-unbeの二種に分かれ⁽⁴⁾、後者には先端部に様々な動物を象った彫刻が付されるとした（バチラー 1926）⁽⁵⁾。

河野広道は、1936年に儀礼用冠の「古い形式」のものには動物形の彫刻が付くとの認識を示し、選択される動物はクマが最も多く、キツネ、オオカミがこれに続くことを指摘した。また、動物形として選択される種に、「鶴鴒は八雲・長万部地方に多く、狼は有珠、虻田、日高の一部、十勝の一部等」（河野 1971（1936）：185-186）という地域差が認められることを述べている。

1941年には、金田一京助・杉山寿栄男が8点の儀礼用冠を図示し、「縄紋」と呼称する縄による装飾を有する資料4点を「比較的古式」のものとし、その他の資料は「縄紋」が略されたものとの解釈を提示した（金田一・杉山 1941：41）。

これらの指摘は、いずれも儀礼用冠にいくつかのタイ

大坂 拓：北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

(1) 以下では、過去に異なった名称が使用されていた時期を含めて、「北大植物園・博物館」と呼称する。

(2) 本稿の対象となる資料は、従来「幣冠」「礼冠」など多くの日本語名称が使用されてきた。アイヌ語名称には方言差や、日常語と雅語での差異が認められることから、用語を特定のアイヌ語で統一することも難しいため、本稿では儀礼用冠の名称で統一する。

(3) 本稿では、博物館などに収蔵される資料の収集年代、収集地、製作者、使用者に関する情報を「背景情報」と呼称する。

(4) 1900年には、儀礼用冠を指す語に「sapaunbe」「inaoru」「ekashpaunbe」があるものとしている（バチエラ 1900：188）。

(5) この二種類の名称や、使用者の差異について聞き取った地域は不明。

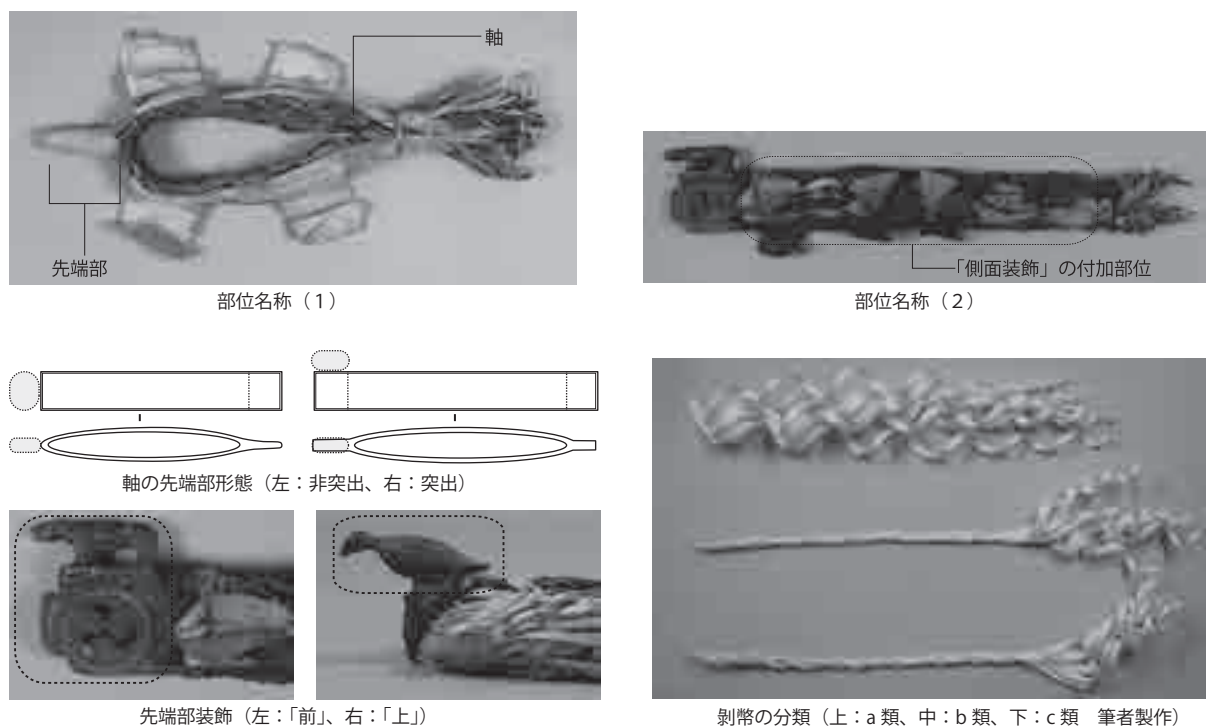


図1 属性の名称

ブが存在することを述べたもので、Batchelorと河野は動物形木製品の有無、金田一・杉山は「縄紋」と呼んだ縄による装飾の有無に着目して分類をおこなっている。また、タイプの違いについて、Batchelorは使用する年齢層の違いを指摘し、河野および金田一・杉山は年代学的新古関係を想定している。

この段階の先駆的議論は、当時のフィールドワークによって得られた、今日では得難い貴重な情報を含む可能性が高い。ただし、それぞれの記述からは、地域差や新古関係に関する認識がどのような調査から導かれたのか、知ることは困難である。

1970年代には、萱野茂が、沙流川流域を中心としてアイヌ民具を集成した金字塔的著作『アイヌの民具』（萱野 1978）を刊行し、儀礼用冠についても図・写真を併用した詳細な解説を加えた。その中で萱野は、沙流川流域と日高東部三石地方の儀礼用冠のあいだに形態差を指摘したうえで、沙流川流域二風谷では周囲に巻かれた剥幣⁽⁶⁾が古くなると燃やし取り換えるのに対し、三石地方では重ねていくために形態の差異が生じることを述べた。萱野の指摘は、自身が各地で収集した資料の比較に基づいたものの可能性があり（付表：77-85）、基礎的な形態差の指摘に留まらず、形態差が生じる要因が使用法の地域差にあることを簡潔に説明した点に特色がある。

その後、様々な民族調査でアイヌ語名称や動物形木製品の有無、使用の状況などに関する情報は蓄積されてきたが（北海道教育委員会 1987ほか）、日高西部・東部を除けば各地域の儀礼用冠の基礎的な特徴は未整理のままとなっている。

3 分類

(1) 対象資料の選択

現在、北海道内の博物館及び類似施設・教育委員会に所蔵される儀礼用冠は、図録等の刊行物によって確認可能なものだけでも約140点におよぶが（付表）、先に述べたように、収集地・収集年代が明確な「基準作」（佐々木 1997）とし得る資料は極めて少ない。

本稿で北大植物園・博物館所蔵資料を主要な分析対象として選択した理由は、2007年までの悉皆的調査（佐々木・古川・小谷 2008、[北大植物園]編 2008）、加藤克による精密な関連記録の整理・公表（加藤 2004、2008；加藤編 2012）により、儀礼用冠20点のうち11点の収集地、さらにそのうち6点の収集年が明らかになっていること、加えて資料群の形成年代が1870年代～1940年代という狭い時期にほぼ限定されることから、基準的資料となりうると判断したことによる。

(6) inaw kike、cimesu inawなどと呼ばれるものを指す。「剥幣」等の用語は北原による（北原 2014：84-86）。

(7) 沙流川流域でkikecinoye inawと呼ばれる木幣と同じ技術を用いているものの、長翅が木材の周囲にまんべんなく削り出されるのではなく、二方向に限られるものが多くみられる。このような場合、長翅を削り出す段階で木幣と儀礼用冠が作り分けられていたものと考えられる。

表1 属性分析表

分類	資料番号	収集地	収集年	軸の有無		軸の先端形態		側面装飾					先端部装飾		
				無軸	有軸	非突出	突出	木幣	剥幣	縄	無1	無2	前	上	無
				I	II	a	b	1	2	3	4	5	-	-	-
I 類	33852			○		-	-								
II a1 類	9595	石狩	1878年		○	○		○							
	10631	旭川近文			○	○		○							
II a2 類	9594				○	○			○				○		
	9597	沙流	1884年		○	○			○	※1			○		
	9598	恵庭	1937年		○	○			○				○		
	9600	新冠			○	○			○				○		
	10629				○	○			○				○		
	11243	平取貫気別	1936年		○	○			○				○		
	11245	沙流	1914年		○	○			○				○		
II a3 類	9591				○	○				○			○		
	11249				○	○				○					○※2
II a4 類	9599	近文			○	○					○		○		
II b2 類	9596	室蘭			○		○		○					○	
	11242	静内農屋	1936年		○		○		○					○	
II b3 類	9593	室蘭			○		○			○					○
	11247				○		○			○					○
II b5 類	11246				○		○					○		○※3	
	11244				○		○					○			○
	11248				○		○					○			○

※1：9597は一部の剥幣の下にコイル状をなす縄が観察され、2類と3類の中間的な性格をもつ可能性がある。

※2：11249は縄によって先端部装飾を作り出したものとみることができる。

※3：11246は飾金具を取り付けたもの。

※：II b1類に該当するものとして付表45・46などがある。

儀礼用冠 I 類



【資料番号 33852】



儀礼用冠 II a1 類



【資料番号 9595】石狩／1878 年



【資料番号 10631】旭川近文

図2 儀礼用冠の分類 (1)



儀礼用冠Ⅱa2 類



【資料番号 9594】



【資料番号 9597】 沙流／1884 年



【資料番号 9598】 恵庭／1937 年



【資料番号 9600】 新冠



【資料番号 10629】



【資料番号 11243】 平取貫気別／1936 年



【資料番号 11245】 沙流／1914 年



図3 儀礼用冠の分類 (2)

儀礼用冠Ⅱ a3 類



【資料番号 9591】



【資料番号 11249】



儀礼用冠Ⅱ a4 類



【資料番号 9599】 近文



儀礼用冠Ⅱ b2 類



【資料番号 9596】 室蘭



【資料番号 11242】 静内農屋／1936 年



儀礼用冠Ⅱ b3 類



【資料番号 9593】 室蘭



【資料番号 11247】



図4 儀礼用冠の分類 (3)

儀礼用冠Ⅱb5 類



【資料番号 11246】



【資料番号 11244】



【資料番号 11248】



図5 儀礼用冠の分類 (4)

(2) 属性の設定

分類は、軸の有無、軸の先端形態、側面装飾の種別(図1)をもとに、階層的に設定する(表1)。

[軸の有無]

■ I 無軸

長翅を削りだした木幣を⁽⁷⁾、長翅の直下で本体の木材を切断し、長翅の端部を結束して用いるもの。

■ II 有軸

ヤマブドウの外皮・内皮(【9591・9595・9596・9597・11242・11245・11247・11249】)、ガマの葉(【9593・10629】)など植物質の材を用いたものや、刀帯と同じ製作技術で作られた帯(【10631】)を軸と呼称し、これを有するもの。

[軸の先端形態]

■ a 非突出

先端部側がU字形をなすように折り曲げられた軸を有するもの。後述する側面装飾に用いる剥幣を挟み込むため、縄や剥幣を縛りつけたものはb類に近似した形態をなすものもある(【10629】)。

■ b 突出

先端部側に軸を結束して3~4cm程度の突出部を作り出したもの。

[側面装飾]

■ 1 木幣

長翅を削りだした木幣を、長翅の直下で本体の木材を切断し、長翅の端部を結束して用いるもの。

■ 2 剥幣

b類が最も多く(【9591・9594・9597・9600・10629・11243・11245・11249】)、a類(【9596・9598】)、c類(【11246・11244・11248】)もある。

■ 3 縄

撚りをかけた1本の植物繊維に、もう1本を撚りをかけながら巻き付けることで作成されたコイル状ものを含め、縄による装飾が見られるものを一括した。コイル状の縄はヤマブドウの外皮(【9591・11246】)、ガマの葉(【9593・11247】)などが用いられる⁽⁸⁾。

■ 4 無1

側面装飾が欠如するもの。

■ 5 無2

コイル状の縄を鎖編みして軸としたもの。軸そのものが側面の装飾を兼ねる。

このうち、軸の有無および先端形態は使用の状況によって変動することがないことから、分類はこの二属性を上位に位置づける。

側面装飾は使用時に変更される可能性があるが、最も下部に施されたものを基準とする⁽⁹⁾。全て取り外して変更した場合には別の分類群に分類されることとなる。側面装飾のうち、「無2」は使用の際に装飾を付加した可能性があるが、資料数が少なく、使用時の状況を確認で

(8) これらの素材がガマの葉であることは、北海道アイヌ協会学芸員(当時)津田命子氏のご教示を受けた。

(9) 一例として、【資料番号9593】は、鷹部屋福平の論文図版(鷹部屋 1942)から、かつて剥幣a類が付加されていたことが知られるが、側面装飾の最上部に付加されたものであり、分類に影響を与えるものではない。

きる記録が存在しないため、暫定的に分類属性として認める。

先端部装飾の有無は変動する可能性があるため、分類の基準としては用いない⁽¹⁰⁾。ただし、先端部装飾が付加される位置は、軸の先端形態が非突出の場合には「前」、突出の場合には「上」と組み合う例が多い。これは先端部装飾「前」が軸の突出と同様の形態をなすため、代替的な関係にあるためと推測される。

(3) 分類案の提示

分類は先に提示した属性について、軸の有無にローマ数字、軸の先端形態にアルファベット、側面装飾にアラビア数字をあてて示す。北大植物園・博物館収蔵資料には該当するものがないため欠番となるものがある。

■ I 類：(図2【33852】)

1点が該当する。1本の木材から2方向に長翅を削り出し編みこんだ後、短小な剥幣a類を6箇所差し込んでいる。

■ IIa1類：(図2【9595・10631】)

2点が該当する。側面装飾に1本の木幣と布を用いるもの(【9595】)、2本の木幣の上に剥幣a類を重ねるもの(【10631】)がある。

■ IIa2類：(図3全点)

7点が該当する。先端部装飾は全てクマ形木製品で強い斉一性を示す。側面装飾に用いる剥幣はa類が多用されるもの(【9598】)と、b類(【9594・9597・9600・10629・11243・11245】)がある。

■ IIa3類：(図4【9591・11249】)

2点が該当する。先端部装飾にクマ形木製品を用いるもの(【9591】)、側面装飾から連続するコイル状の縄を突出させ先端部装飾とするもの(【11249】)がある。

■ IIa4類：(図49599)

1点が該当する。イラクサ繊維の三つ編みを三段結束したものを軸とし、先端部装飾は具象的なクマ頭部を用いる。

■ IIb2類：(図4【9596・11242】)

2点が該当する。側面装飾に用いる剥幣はa類(【9596】)とb類(【11242】)がある。

■ IIb3類：(図4【9593・11247】)

2点が該当する。2点ともに側面装飾はガマの葉をコイル状に撚り合わせた後に鎖編みにしたもので、非常に共通性が高い。

■ IIb5類：(図5【11246・11244・11248】)

3点が該当し、いずれも植物繊維をコイル状に撚り合

わせた縄を鎖編みにしたものを軸とし、先端部はコイル状の縄を絡み合わせて作り出す。いずれも剥幣c類を絡み合わせている点はそのほかの分類群に見られない特徴といえる。

4 北大植物園・博物館所蔵資料関連記録の検討

(1) 検討の方法

本章では、前節で設定した分類群の空間分布を把握する前提として、加藤が公開した関連文書の記述(加藤2004、2008)をもとに、収集地等の情報を確認する。なお、本節の記述は台帳(『北大植物園』編2008)の情報を前提として、その他の記述とのあいだで齟齬の有無を確認するという手順をとる点に限界を有している。

(2) 文献資料の検討

1880年代～1920年代の文献記録

1883(明治16)年7月に刊行された「札幌博物館陳列品目録」によれば、当時「札幌の一種チャパアンベ」1点が収蔵されていたことが確認できる。

1883年2月～12月までの収集資料には儀礼用冠は含まれず、「明治17年1月ヨリ同6月迄旧土人器具採集」に「札幌の一種シャバアンベ」が収集された記録がある。

1907年前後にまとめられた「民族資料整理カード」には、カードNo102に冠として3点の記載があるが、そのうち1点は千島列島で採集された帽子(【10465】)であり(加藤2008:78)、本稿の検討対象から除外する。この段階では、儀礼用冠は先に確認した2点が収蔵されていたとみて矛盾はなく、「44 シャバアンベ2」の収集地は「石狩石狩」となっていることから、現在の目録(『北大植物園』編2008)で収集年1878年、収集地「石狩」となっている【9595】が該当するとみて良い。

「334 シャバアンベ2」の収集地は「沙流」となっており、現在の台帳で収集年1884年、収集地「沙流」となっている【9597】が該当するとみられる。

「民族資料整理カード」が作成された直後、1910年に刊行された『札幌博物館案内』(村田編1910)には「(1) 札幌 アイヌ名シャパウンベ、儀式の節に用ふる札幌なり 十五号石狩国石狩郡」の記載があり、収集地の一致から【9595】の可能性が考えられる。

その後、1920年代の関連記録は確認されていない。

1930年代～1940年代の文献記録

この時期には1931年に名取武光が着任、後に犬飼哲夫による研究活動も始まり、アイヌ民具の収集が活発化

(10) 一例として、更科源蔵による足寄町での調査での、先端部装飾を取り外した事例に関する言及をあげることができる(表2:S3)。



図6 北大植物園・博物館における儀礼と使用された民具資料

することが指摘されている（加藤 2004、2008）。

「北大附属博物館所蔵アイヌ土俗品解説」⁽¹¹⁾（名取 1934ab、1935）の記述によれば、当時、北大植物園・博物館には「沙流産三個、石狩産一個、八雲産一個、室蘭産一個、近文産一個、産地不明一個」の儀礼用冠計8点が所蔵されていた。

「土俗品解説」に写真が掲載された4点のうち、1点は河野常吉によって有珠ないし虻田⁽¹²⁾で収集された資料で、現在は旭川市立博物館に所蔵されている（旭川市博物館編 1999）。残る3点⁽¹³⁾は、現在北大植物園・博物館に所蔵される【9594】・【9595】・【11245】である。

【9595】は、先に確認したとおり台帳で1878年の収集記録があり、各種の記録からも収集地等の情報に矛盾がないことが確認できる。【11245】は台帳および添付されたラベル⁽¹⁴⁾から1914年の収集記録を確認できる。これらの資料は、写真が掲載された年代と台帳情報は整

合している⁽¹⁵⁾。

その他、「土俗品解説」には、写真が掲載されていない資料について解説文中で詳細に言及されている例があり、以下の2点が収蔵資料と照合できる可能性がある。

「近文アイヌには、蓴麻で編み之に熊の前立をつけ、側面に金属を飾ったものを用いている者がある」という記述は、【9599】の特徴、台帳の収集地情報と一致する。⁽¹⁶⁾

また、「八雲地方で簡単に造るのは、柳の木的一方から削り花を造り、削り細められた部分の木部を切り、削り花を左右二つに分けて此の各で組編を造り、適當の長さの所で之を合わせて環状となし、切り残された柳の木部を前立の位置にして冠り、更に両側に六つの削り花を下げる」という記述があり、【33852】の特徴と一致している。

その後、「物品監守証書」（加藤 2008：表11）によれ

(11) 以下「土俗品解説」と略記する。

(12) 旭川市博物館登録番号No.4118（付表：97）。収集地は河野広道氏の記述（河野 1936）では有珠、所蔵品目録（旭川市博物館編 1999）では虻田とされている。

(13) 北海道原始文化聚英（河野編 1933a）には、3点のほぼ同カットの写真が掲載されていることから、3点の収集年は1933年以前にさかのぼる。

(14) 加藤（2004）の「ラベル2」。

(15) 「沙流産三点」のうち1点には、先に確認した1884年収集の資料番号【9597】が該当する可能性がある。

(16) 加藤が紹介した『北海道帝国大学年鑑』の記述によれば、1933年8月に「近文アイヌ空知新次郎ヲシチアイヌ土俗品ヲ製作セシム」との記述がある（加藤 2008：45）。これは台帳にある【9599】の製作者と一致しており、【9599】は1933年に委託により製作されたものに含まれる可能性がある。



図7 噴火湾沿岸の熊神用冠（左：1933年12月10日に実施の儀礼、右：年代不明、長万部町の人々が実施した儀礼）

ば、1935年5月18日から1943年7月25日のあいだに儀礼用冠と推定される資料が10点収集されており、資料提供者の中には平取町ベナコリの川上サノウク、長万部町の司馬力彌といった著名な人物が含まれる。しかし、現在ではどの資料が両名から入手されたものに該当するのか不明となっている。

(3) 写真資料の検討

本節では、北大植物園・博物館が所蔵、公開している写真資料の中から（加藤編 2012）、儀礼用冠に関わるものを抽出して検討を加える。

名取は、1933年12月10日に八雲町の椎久年蔵を北大植物園に招聘して熊送り儀礼の記録をおこなっており、比較的鮮明な写真が撮影されている（図6：1・2、図7左）。また、この儀礼に関わるものとして、河野広道氏による調査ノート（青柳編 1982：72-73）が公開されている。

図6に関連資料を示した。この写真で椎久が着用している儀礼用冠は、三つ編みされ、左側面に3カ所の散長翅状をなす剥幣を差し込んでおり、【33852】の特徴と一致していることが確認できる。現在は剥幣の彎曲がやや異なるが、経年変化によって彎曲が弱まった可能性がある。前節で確認した「土俗品解説」の記述とも整合しており、現在では背景情報が失われている【33852】は、収集地として八雲（製作者を札幌へ招聘）、収集年1933年の情報が追加できる可能性が高い。

儀礼の実施にあたって椎久が製作した木幣類は現在一括して北大植物園・博物館に収蔵されており⁽¹⁷⁾（北原 2014：111）、儀礼用冠もこのとき、同様に収集された

ものと推測できる⁽¹⁸⁾。

ただし、このように写真資料で確認できる使用者が製作・使用者に結び付くと判断できる事例は限られている。

1937年2月に新十津川出身の樺勘太郎を招聘して実施された熊送り儀礼を写した写真では、樺が資料番号【9593】の儀礼用冠を着用しており（名取 1941：59 第十三図）、台帳の収集地情報（室蘭）と一致しない。この写真で樺が着用している木綿衣は、1935年に収集されたもの⁽¹⁹⁾で、儀礼の際に収集されたものとは考えにくい。同じ衣服は十勝伏古の古川コサンケアンが着用している例も確認できる（犬飼・名取 1939：262 第七図、同267第十一図、同269第十三図）。

同様の事例として、1937年2月に浜増毛出身の山下三五郎が着用している木綿衣⁽²⁰⁾（名取 1941：61 第一四図）を、同年3月の儀礼で塘路から招へいされた島太郎が着用している事例もある（名取1941：66 第十八図A）。

このような場合、儀礼用冠や木綿衣は、北大植物園・博物館の所蔵品が使用された可能性が考えられる。一方、図6で椎久が着用している衣服は、現在の北大植物園・博物館収蔵資料には該当するものが無い。

衣服以外でも、図6-2で祭壇に掛けられた儀礼用刀の鞘は、明治期収集のデータがある【11050】（図6：4）、刀帯は収集地が沙流とされる【9653】（図6：3）と同定できた。

以上の事例から判断して、名取らが各地のアイヌ民族を招聘し実施した儀礼では、使用される民具は①北大植物園・博物館の収蔵品、②招聘された人物が持参したもの、③その場で製作したものという異なった由来のものが組み合わされていた可能性を考慮しておく必要がある⁽²¹⁾。

(17) 資料番号【10178】。

(18) 椎久が資料番号【33852】と同様の特徴をもった儀礼用冠を使用している事例は、1997年に学習院大学資料館で開催された第17回特別展「徳川義親侯とユーラップ・アイヌ」展示パンフレット（佐々木・谷本・西田 1997）に掲載された昭和初期の写真、『アイヌ研究』（高倉 1966）巻頭に掲載された1956年の「鯨祭り」を撮影した写真などがある。

(19) 収蔵番号【13】

(20) 収蔵番号【27】

(21) 注9で指摘した剥幣は、収集当初に存在した可能性とともに、1937年の儀礼に際して樺によって追加された可能性を考慮する必要がある。

つまり、写真資料の状況を直ちに台帳情報を修正するものと判断することはできないのである⁽²²⁾。

以上の検討の結果、「台帳」の記録には欠落があるとはいえ、儀礼用冠に関する限り、記載内容がその他の記録と決定的な齟齬をきたす例はないことを確認した。以下の検討では、台帳情報を前提として進めることとする。

5 各分類群の地理的分布

本節では、前節で確認した背景情報をもとに各分類群の空間分布を確認する。その際、資料数の不足を補うため、北大植物園・博物館と重なる1870年代～1940年代に収集された資料を加える。

(1) 背景情報を有する資料の検討

■ I 類

【33852】は、前節の検討によって八雲町の椎久年蔵によって製作された可能性が考えられる。ただし、資料数が僅かで、現段階では空間分布がどの範囲まで広がっていたのか明らかにするのは困難である。

なお、八雲町・長万部町では、熊送り儀礼に際して熊神の頭部に【33852】に類似した冠を被せる(図7)⁽²³⁾。北大植物園・博物館に収蔵される椎久による祭壇を観察すると、この熊神用冠は【33852】に比べ先端部が長く、先端部上面に祖印を刻む点に相違がある。

■ II a1類

【9595・10631】はともに石狩川流域で収集されたものであるが、関連資料として、1900年にバシュフォード・ディーンが有珠で収集した資料があり(出利葉2006)、少なくとも胆振東部まで分布範囲が広がるものと判断できる(図8:4)。

■ II a2類

5点のうち3点【9597・11243・11245】は沙流川流域の収集資料であり、残る2点も近接する新冠【9600】・恵庭【9598】の比較的狭い範囲に集中している。

関連資料の一例として、ロシア民族学博物館に所蔵される、V.N.ヴァシーリエフが1912年に平取で収集した儀礼用冠6点全てがII a2類に属する例がある⁽²⁴⁾。

■ II a3類

いずれも背景情報を欠くため踏み込んだ分析はおこなわない。

■ II a4類

資料数が少ないことから踏み込んだ分析はおこなわない。【9599】は木彫り熊と共通する写実的な彫刻を取り付けるもので、資料そのものが比較的新しい可能性がある。

■ II b2類

室蘭・新ひだか町静内でそれぞれ1点が収集されているが、資料数が少ないことから踏み込んだ分析はおこなわない。

■ II b3類

収集地に関する情報は【9593】が室蘭とされるのみだが、関連資料と古写真資料の検討から噴火湾沿岸を中心とする分布が確認できるため、次節で詳述する。

■ II b5類

収集地に関する情報が欠如しており、類例も現在まで知られていない。II b3類に用いられる側面装飾との共通性を評価すれば、噴火湾沿岸に分布した可能性を想定することは可能だが、今後の資料の精査が必要である。

(2) II b3類関連資料の検討

II b3類に該当する資料のうち、収集年代が1940年代を遡るものとして、現在松前城資料館が所蔵する「ピリカ会」関連資料、北海道博物館が所蔵する「エカシケル」関連資料がある。

「ピリカ会」は、1909年に村岡格が中心となり設立された団体で、八雲町落部を中心に活動し、そのコレクションには、注記などから落部を中心とした地域で収集した資料が含まれるものと推定されている(北海道立アイヌ民族文化研究センター編 2005)。儀礼用冠は8点全てがII b類で、うち7点はII b3類である。CV114(付表:126)はII b3類に分類されるものの一つで、ピリカ会が1909年に発行した絵葉書で辨開風次郎⁽²⁵⁾が着用しているのが確認できることから、八雲町落部地域で使用された可能性が高いものと判断できる。

「エカシケル」は、1931年に現在の長万部町旭浜に開設された展示施設で、「エカシケル保存会」がその運営に関与していたことが知られている(古原・小川2009)。エカシケル保存会の幹事として記載されている小倉範三郎によるコレクションは現在、北海道博物館に所蔵されており、儀礼用冠2点(付表:53・54)はいずれもII b3類に分類される。

(22) 本稿執筆中に北原次郎太氏より、祭壇に使用されたゴザなどにも同様の事例があるとのことご教示を頂いた。

(23) 図7右の写真は、詳細な撮影年代が不明ながら、長万部町の司馬力彌らが中心となって実施された熊送り儀礼を撮影したものであることから、例として用いた。

(24) 『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』(荻原・古原・ヴァレンチーナ V.コルパチョーヴァ編 2007) 掲載資料のうちNo.2817-52・53・55、No.3006-57、No.5102-295・296。ほかに前端部装飾1点(No.5102-294)があり、これもその他のII a類と同様の特徴を示す。

(25) 二海郡八雲町落部出身(1847-1924)

(26) その他に、噴火湾岸で使用されたことが確実な事例として、1930年代以前収集の河野常吉収集資料(図8:3、付表:97)、1981年に豊浦町で家屋解体中に発見された資料(付表:125)がある。

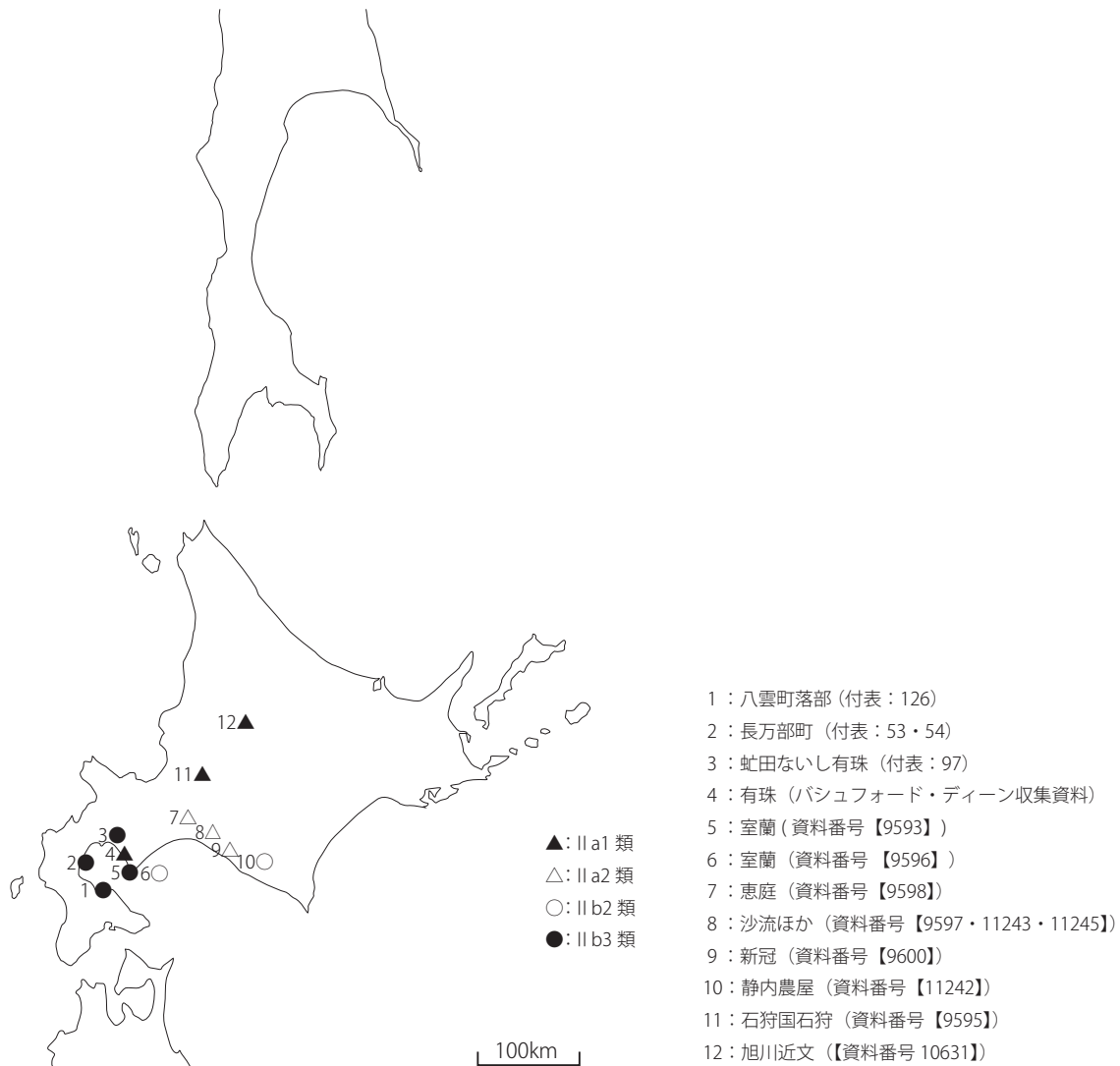


図8 北大植物園・博物館収蔵資料及び関連資料の空間分布

こうした事例から、II b3類は噴火湾沿岸に広く分布していた可能性が高い⁽²⁶⁾。同様の縄を用いる II a3類、II b5類もこの地域で使用された可能性も想定できるが、こちらは現状では推測の域を出ず、様々な資料の精査によって情報の精度を高めていく必要がある⁽²⁷⁾。

(3) 分布の空白

ここまでの検討で、北海道大学植物園・博物館所蔵資料には、確実な北海道東部・北部の資料が含まれていないことが指摘でき(図8)、コレクションの形成に深く関わった名取らが、花矢やキケウシバスイを全道的に収集した事例(名取 1985)と比較した場合、際立った差異をなしている。

噴火湾沿岸から胆振・日高は北海道内で相対的に人口

規模が大きい地域とはいえ、人口規模の違いだけでは、花矢等のコレクション内容との違いは説明が難しい。儀礼用冠に関しては、各地域のバリエーションに配慮した収集が徹底できなかった可能性が考えられる。

その背景としては、新十津川・名寄で儀礼用冠を用いなかったとするデータが存在すること(表2: S5・13)、北海道東部では標茶でほとんど用いないという情報(表2: S1・11)、釧路でも用いないか、限られた人物しか用いないという情報(表2: S6・12・15)があることとの関連が想定される。

北海道東部では南西部に比べ相対的に儀礼用冠の使用が限定される状況があり、それが研究者による収集を困難にし、コレクション形成に影響を与えた可能性が想定できる。

(27) ただし、噴火湾沿岸では1939年1月の長万部での熊送り儀礼に際して八雲、豊浦、白老から参加者が参集するなど(小樽新聞1939年1月31日夕刊)、密接な関係にあったことが知られており、写真等から使用された民具の帰属地域をより詳細に絞り込むには困難が伴うことが予想される。

表2 『知里真志保フィールドノート』および更科源蔵『コタン探訪帳』の関連記述

番号	文献	ページ	地域	調査年月日	情報	備考
C1	知里1951	CM219-49	千歳市	1951年6月10日	「Sapaunpe/1. クマの頭の形ツケタ ●●/2. デンデン虫ミタイニマイタモノラツケタノモアル/コノ2種シカミタコトナイ」・「Nupkipetノ奥ニPorosirアル。我々ノ先祖ハクマダ。その山から何10代カ前ニクマ出テキテ/アル女ニホレタ ソノ子生ンダ/Nupur[ママ]korkamui (キムンカムイの親方) /タカラソコヘinau epuniスル」	知里・河野・更科の共同調査で、S4と同時に記録されたノート。
C2	知里1951	CM211-17	虻田町	1951年10月27日	「sapaunpe/■●/ミズキの心を出して/キツネの形 クマの形 クマの頭/ある家でサメの歯 車ガイのウタの所/人喰いサメだったそうだ 舟のカイをかじった」	
C3	知里1951	CM211-28	長万部町	1951年10月28日	「Sapa-un-pe/ソノクマに何もめづらしいことあつたか スグレテ大キナ/クマとつた時の記念トシテツケル/200年位■ニテ/オレノ母のオジ トツクマ 悪党クマ/ソノクマのそばで の形 山デマキリでほつた。sapaunpeにつけて/おいたの函館市のサクラマツラ[ママ]の応援ニクママツリ/グランドで送つた時に現場ニ忘レテキタガ 電話で/たのんだが出ない/キツネhurepの形」	
S1	更科1951	4-23	標茶町	1951年4月21日	「Sapaunbeは子供の頃一人か二人つかつてゐた人があつた」	語形他方言か
S2	更科1951	4-40~41	足寄町	1951年5月18日	「かぶり物 paunbe 男だけが用ひ金の鎖を真〔カ〕にさげ横にならべてsaranbeをつける。」・「inausi稲牛のekasiはapukasi kamuy (paikai kamui)のnokahaをつけてゐた このkamuiはpaikai kamuiで、夜になるとこの人の家には夕方になると群なして来て泊り朝になると出て行く」	
S3	更科1951	4-45	足寄町	1951年5月18日	「元は前にkimun kamuiのnokahaをつけ、後に狼のnokaをつけたがそれをnusaに納めてクサリを下げるやうになつた」	図あり
S4	更科1951	4-74	千歳市・恵庭市	1951年6月10日	「サバウンベにつける守り神は熊の頭が主で、丸いカタツムリのやうなものをつけた人もあつた」・「貫気別の奥のporosiri岳にkamui nomiする。それは私の先祖がporosiriの熊■で、nupuri kor kamuiといつたのが、徐々人間の姿[カ]になって人間の女にほれて生れた子供の子孫である」	知里・河野・更科の共同調査で、C1と同時に記録されたノート。
S5	更科1952	7-3	名寄市	1952年6月10日	「Sapaunbeは作らない」	
S6	更科1953	8-56	弟子屈町	1953年5月6日	「paunbe paunbeはこつちになかつたものだ。釧路にもなかつたが、この頃やつてゐるのは日高か旭川の発明にマネしたのだ」	
S7	更科1953	8-60	静内町	1953年6月28日	「paunbe (sapaunbe) 男だけ。カムイノカは木でつくつた」	
S8	更科1953	8-69	新冠町	1953年6月29日	「Sapaunbe じ■さまのもの、鳥の何かつけてゐる」	
S9	更科1953	8-102	鶴川町汐見	1953年7月1日	「sapaunbeは皆もつてゐた。熊の頭の形、ワシの頭 フクロの頭、神様に酒をあげてしまふと、pasiyuiに酒をつけてあげる」	
S10	更科1953	8-124	音更町	1953年7月9日	「inauru (Sapaunbeのこと) はその人一代で終り子孫に傳へない。一本の木でinauをつくり木の芯を一寸位のこして切り、kikeを編つ[ママ]で後でしばり先の芯には別に何も刻まない。nupuru inauru 女がtusurするときにかぶる。つくり方は同じだが、飾をつけないでinau kikeをまきつける。普通のinauruには布などをつけて飾にする」	
S11	更科1953	8-185	標茶町塘路	1953年9月5日	「冠 sapaunbeを用ひないのは頭は大事でものをのせるものでないといはれた。Kamui nomiをするとき上から見たり帽子をかぶつて入るとひどくcharankeをつけられる」	語形他方言か
S12	更科1956	11-3	釧路市阿寒	1956年4月15日	「冠 (paunbe) paunbeは釧路ではなかつたものだ。阿寒は美幌や陸別の血統だからottenaだけがかぶつてゐるのを見たことがあるが、nokahaはつけてゐない」	
S13	更科1956	11-41	新十津川町	1956年10月6日	「冠 (sapaunbe) これはなかつた日高の真似だ」	調査地は旭川
S14	更科1957	11-75	平取町二風谷	1957年8月12日	「サバウンベノカ/汐流谷は全部カムイマラプト/サバウンベをかぶるのは酋長格の者だけ」	
S15	更科1958	11-154	鶴居村下雪裡	1958年8月21日	「冠 (paunbe) 昔は女の人がかトウスをやるトウスバウンベがあつた。老人のかぶるのは帽子のようになってゐて、部落で一人くらゐより用ひられない。cimesyu inauでつくり、上の方が網のようになってゐた」	調査地は札幌
S16	更科1962	15-12	静内町豊畑	1962年3月17日	「冠 (sapaunpe) 酋長か有志でないとかぶれない。Nokahaには熊の爪、熊の頭の彫物、鷲の頭の彫物などつける。私の家には熊と鷲の頭のある」	
S17	更科1963	18-130	鶴川町春日	1963年9月22日	「Sapaunbe 祭りのとき誰でも二十才以上位のもののかぶる。熊の形のnokahaをつける」	

※:不鮮明で判読が困難なもの、アイヌ語名称のみのもの、鉢巻き及び女性が呪術に用いるのものに関する記述を除く。

※:■は判読困難箇所、●は個人情報を含む部分。

※:「文献」欄は、知里真志保、更科源蔵による記載の年を示す。

6 さいごに

本稿は、属性の組合せから儀礼用冠の分類群を設定したうえで、地理的分布を確認してきた。多くの分類群では資料数が少ないため、一つの地域の中での使用される比率などについては、今回の分析から言及するべきではない。

ただし、日高西部を中心として比較的点数が豊富なⅡa2類が多数分布する一方、この地域で他の型式がほとんど収集されていない点は注目に値する。

また、Ⅱb3類は噴火湾沿岸部を中心に分布した可能性が考えられた。金田一・杉山は、本稿のⅡb3類に相当する資料を「日高地方の最も古式のもの」（金田一・杉山 1941: 41）としており、その後、具体的な検討が加えられない状況が続いてきたが、本稿での分析によればⅡb3類は、日高西部を中心とするⅡa2類とは異なる分布をもった可能性が高い。今後は、金田一・杉山らが依拠した情報の文献学的調査などと合わせることで、より精度の高い議論が可能になるものと考えられる。

謝辞

本稿の執筆にあたって、北原次郎太・山崎幸治（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、加藤克（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園）、津田命子の各氏にご教示・ご協力を賜った。末筆ながら記して感謝いたします。

引用文献

- 青柳信克編 1982. 河野広道ノート民族誌篇 1—イオマンテ・イナウ篇一. 北海道出版企画センター.
- 旭川市博物館編 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X—民族資料/服飾関係—.
- 犬飼哲夫 1935. アイヌが行ふ熊の解剖. 民族学研究1(13): 482-491. 日本文化人類学会.
- 犬飼哲夫・名取武光 1939. イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(一). 北方文化研究報告 2: 237-271.
- 犬飼哲夫・名取武光 1940. イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(二). 北方文化研究報告 3: 79-135.
- 沖野慎二 2000. 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(上). 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 5: 1-19.
- 沖野慎二 2001. 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(中). 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 6: 1-18.
- 沖野慎二 2001. 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(下). 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 7: 1-20.
- 加藤 克 2004. 札幌農学校所属博物館のアイヌ民族資料. 北大植物園研究紀要 4: 1-54.

- 加藤 克 2008. 北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について: 歴史的背景を中心に. 北大植物園研究紀要 8: 35-91.
- 加藤克編 2012. 大学博物館所蔵古写真の現代的意義に関する研究(日本学術振興会科学研究費補助金(2009-2011年度)基盤研究(C)研究成果報告書). 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター.
- 萱野茂 1978. アイヌの民具. すずさわ書店.
- 北原次郎太 2012a. 植物園所蔵写真が持つ可能性. 加藤克編 2012. 大学博物館所蔵古写真の現代的意義に関する研究(日本学術振興会科学研究費補助金(2009-2011年度)基盤研究(C)研究成果報告書). pp. 41-44. 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター.
- 北原次郎太 2012b. 二谷国松口述知里真志保筆録 新築祝いの祈り詞. 千葉大学ユーラシア言語文化論集 14: 263-305.
- 北原次郎太 2014. アイヌの祭具イナウの研究. 北海道大学出版会.
- 金田一京助・杉山寿栄男 1941. アイヌ芸術 第一巻服装編. (復刻版1973. 北海道出版企画センター)
- 久保寺逸彦 1953. 北海道日高国二風谷コタンに於ける家系とパセオンカミ「尊貴神礼拝」. 金田一京助博士古希記念 言語民族論叢. (2001. 久保寺逸彦著作集 1. に再録)
- 河野広道 1936. アイヌとトーテム的遺風: 特にレブンカムイシロシとキムンカムイシロシについて. 民族学研究 2-1: 45-53 (河野広道著作集刊行会編 1971. 北方文化論 河野広道著作集1. に再録)
- 河野広道編 1933. 北海道原始文化聚英. 野沢信義. (復刻版1977. 北海道出版企画センター.)
- 河野広道編 1933. 北海道原始文化要覧. (復刻版1977. 北海道出版企画センター.)
- 古原敏弘・小川正人 2009. 長万部町教育委員会所蔵のアイヌ資料. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 15: 57-83.
- 佐々木史郎・古原敏弘・小谷凱宣 2008. 北海道内の主要アイヌ資料の再検討(日本学術振興会科学研究費補助金(2005~2007年度)基盤研究(B)研究成果報告書). 国立民族学博物館.
- 佐々木利和 1997. 東京国立博物館のアイヌ民族資料(上). 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 3: 1-22.
- ジェー・バチエラ (John Batchelor) 1900. アイヌ人及其説話. 上編. 教文館.
- ジョン・バチラー (John Batchelor) 1926. AINU LIFE AND LORE. 教文館出版部.
- 鷹部屋福平 1942. アイヌ服飾紋様の研究. 北方文化研究報告 6: 81-137.
- 高倉新一郎 1966. アイヌ研究. 北海道大学生生活協同組合.
- 出利葉浩司 2002. マンローコレクションについて. 海を渡ったアイヌの工芸 英国人医師マンローのコレクションから. pp. 88-97.
- 出利葉浩司 2006. バシフォード・ディーンが収集したアイヌ民族資料について—ディーン・ノート解題—. 北海道開拓記念館調査報告 45: 107-174.
- 名取武光 1934a. アイヌ土俗品解説. ドルメン 3(4): 13-25

- . (1972. 名取武光著作集 I アイヌと考古学(一). に再録)
名取武光 1934b. アイヌ土俗品解説(2). ドルメン 3(7): 59-65 (1972. 名取武光著作集 I アイヌと考古学(一). に再録)
名取武光 1935. アイヌ土俗品解説(3). ドルメン. 3(11): 19-26. (1972. 名取武光著作集 I アイヌと考古学(一). に再録)
名取武光 1940. 北海道噴火湾アイヌの捕鯨. 北方文化研究報告 3: 137-161.
名取武光 1941. 沙流アイヌの熊祭りに於ける神々の由来とヌサ. 北方文化研究報告 4: 35-112.
名取武光 1985. アイヌの花矢と有翼酒箸. 六興出版.
福田茂夫・高橋理・古原敏弘 2005. 豊浦町所蔵のアイヌ資料. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 11: 177-192.
北海道教育委員会 1987. 昭和61年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査VI(十勝・網走地方).
北海道立アイヌ民族文化研究センター編 2005. ピリカ会関係資料の調査研究(北海道立アイヌ民族文化研究センター調査研究報告書 I).
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園[北大植物園]編 2008. 北大植物園資料目録 6 アイヌ民族資料.
※本文中は[]のように略記した。
村田庄次郎編 1910. 札幌博物館案内. 維新堂.

挿図出典

- 図1 部位名称(1)・(2)、先端部装飾:北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園提供写真に文字を記入。軸の形態:筆者作図、剥幣の分類:筆者製作品を筆者が撮影。
第2～6図 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園提供。
第7図 筆者作図
第8図 1: 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園提供、2: 函館市中央図書館提供写真を部分拡大。

付表 北海道内主要機関所蔵の儀礼用冠

番号	収蔵施設	登録名称	収蔵番号	収集地	収集年代	文献	備考
1	市立函館博物館	男物装帽	656	鶴川		市立函館博物館 1979. 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第5編.	馬場コレクション
2	市立函館博物館	男物装帽	657	鶴川		市立函館博物館 1979. 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第5編.	馬場コレクション
3	市立函館博物館	男物装帽	658	鶴川		市立函館博物館 1979. 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第5編.	馬場コレクション
4	市立函館博物館	男物装帽	659	日高		市立函館博物館 1979. 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第5編.	馬場コレクション
5	市立函館博物館	幣冠	216			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
6	市立函館博物館	幣冠	217			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
7	市立函館博物館	幣冠	218			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
8	市立函館博物館	幣冠	219			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
9	市立函館博物館	幣冠	220			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
10	市立函館博物館	幣冠	221			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
11	市立函館博物館	幣冠	222			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
12	市立函館博物館	幣冠	223			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
13	市立函館博物館	幣冠	224			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
14	市立函館博物館	幣冠	225			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
15	市立函館博物館	幣冠	226			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
16	市立函館博物館	幣冠	227			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
17	市立函館博物館	幣冠	228			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
18	市立函館博物館	幣冠	229			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
19	市立函館博物館	幣冠	230			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
20	市立函館博物館	幣冠	231			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
21	市立函館博物館	幣冠	232			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
22	市立函館博物館	幣冠	233			市立函館博物館 1987. 見玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編.	見玉コレクション
23	北海道博物館	幣冠	11241			北海道開拓記念館 2003. 旧拓殖館民族資料コレクション資料目録.	旧拓殖館所蔵
24	北海道博物館	幣冠	11242			北海道開拓記念館 2003. 旧拓殖館民族資料コレクション資料目録.	旧拓殖館所蔵
25	北海道博物館	幣冠	11243			北海道開拓記念館 2003. 旧拓殖館民族資料コレクション資料目録.	旧拓殖館所蔵
26	北海道博物館	幣冠	11244			北海道開拓記念館 2003. 旧拓殖館民族資料コレクション資料目録.	旧拓殖館所蔵
27	北海道博物館	幣冠	22908			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録Ⅰ民族Ⅰ.	近藤コレクション

番号	収蔵施設	登録名称	収蔵番号	収集地	収集年代	文献	備考
28	北海道博物館	幣冠	22909			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
29	北海道博物館	幣冠	22910			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
30	北海道博物館	幣冠	22911			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
31	北海道博物館	幣冠	22912			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
32	北海道博物館	幣冠	22913			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
33	北海道博物館	幣冠	22914			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
34	北海道博物館	幣冠	22915			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
35	北海道博物館	幣冠	22916			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
36	北海道博物館	幣冠	22917			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
37	北海道博物館	幣冠	22918			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
38	北海道博物館	幣冠	22919			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
39	北海道博物館	幣冠	22920			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
40	北海道博物館	幣冠	22921			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
41	北海道博物館	幣冠	22922			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	近藤コレクション
42	北海道博物館	幣冠	27051			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	酪農学園大学旧蔵
43	北海道博物館	幣冠	27052			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	酪農学園大学旧蔵
44	北海道博物館	幣冠	32798			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	小名コレクション
45	北海道博物館	幣冠	33290			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	佐々木コレクション
46	北海道博物館	幣冠	33291			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	佐々木コレクション
47	北海道博物館	幣冠	45651			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	森コレクション
48	北海道博物館	幣冠	45652			北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1民族 I.	森コレクション
49	北海道博物館	幣冠	89559	平取町		北海道開拓記念館 1990. 更科源蔵氏資料目録.	更科コレクション
50	北海道博物館	幣冠	89560			北海道開拓記念館 1990. 更科源蔵氏資料目録.	更科コレクション
51	北海道博物館	幣冠	89561			北海道開拓記念館 1990. 更科源蔵氏資料目録.	更科コレクション
52	北海道博物館	幣冠	89562			北海道開拓記念館 1990. 更科源蔵氏資料目録.	更科コレクション
53	北海道博物館	幣冠	124660			北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・Wカーティスコレクション他資料目録.	小倉コレクション
54	北海道博物館	幣冠	124661			北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・Wカーティスコレクション他資料目録.	小倉コレクション
55	北海道博物館	幣冠	126409	平取町		北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・Wカーティスコレクション他資料目録.	観光物産

番号	収蔵施設	登録名称	収蔵番号	収集地	収集年代	文献	備考
56	北海道博物館	幣冠	126410	平取町		北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・Wカーテイスコレクション他資料目録.	観光物産
57	北海道博物館	幣冠	126411	平取町		北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・Wカーテイスコレクション他資料目録.	観光物産
58	北海道博物館	幣冠	126412	平取町		北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・Wカーテイスコレクション他資料目録.	観光物産
59	北海道博物館	幣冠	126413	平取町		北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・Wカーテイスコレクション他資料目録.	観光物産
60	北海道博物館	幣冠	126414	平取町		北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・Wカーテイスコレクション他資料目録.	観光物産
61	北海道博物館	幣冠	130641			北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・Wカーテイスコレクション他資料目録.	Wカーテイスコレクション
62	北海道博物館	幣冠	158330			北海道開拓記念館 2011. 小嶋新三・慧子コレクション資料目録.	小嶋コレクション
63	北海道博物館	幣冠	158331			北海道開拓記念館 2011. 小嶋新三・慧子コレクション資料目録.	小嶋コレクション
64	アイヌ民族博物館	幣冠	60433	白老		アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
65	アイヌ民族博物館	幣冠	60434			アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
66	アイヌ民族博物館	幣冠	60435			アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
67	アイヌ民族博物館	幣冠	60436			アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
68	アイヌ民族博物館	幣冠	60437			アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
69	アイヌ民族博物館	幣冠	60438	様似	1963年?	アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
70	アイヌ民族博物館	幣冠	60439			アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
71	アイヌ民族博物館	幣冠	60440			アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
72	アイヌ民族博物館	幣冠	60441			アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
73	アイヌ民族博物館	幣冠	60442	釧路		アイヌ民族博物館 1988. アイヌ民族博物館児玉資料目録 I.	
74	アイヌ民族博物館	儀式用冠	72001	虻田		アイヌ民族博物館 1993. 亮昌寺資料目録.	
75	アイヌ民族博物館	儀式用冠	72002			アイヌ民族博物館 1993. 亮昌寺資料目録.	
76	アイヌ民族博物館	儀式用冠	72003			アイヌ民族博物館 1993. 亮昌寺資料目録.	
77	二風谷アイヌ文化資料館	冠 (サパンベ)	820	三石町		北海道教育委員会 1978. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財2) .	
78	二風谷アイヌ文化資料館	冠 (サパンベ)	821	三石町		北海道教育委員会 1978. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財2) .	
79	二風谷アイヌ文化資料館	冠 (サパンベ)	822	三石町		北海道教育委員会 1978. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財2) .	
80	二風谷アイヌ文化博物館	サパンベ (イナウル)	19910614	平取町		平取町立二風谷アイヌ文化博物館 2003. 北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション.	
81	二風谷アイヌ文化博物館	サパンベ (イナウル)	19910613	平取町		平取町立二風谷アイヌ文化博物館 2003. 北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション.	
82	二風谷アイヌ文化博物館	サパンベ (イナウル)	19910610	平取町		平取町立二風谷アイヌ文化博物館 2003. 北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション.	
83	二風谷アイヌ文化博物館	サパンベ (イナウル)	KS018	平取町		平取町立二風谷アイヌ文化博物館 2003. 北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション.	

番号	収蔵施設	登録名称	収蔵番号	収集地	収集年代	文献	備考
84	二風谷アイヌ文化博物館	サパンベ (イナウル)	KS004	平取町	1970年代	平取町立二風谷アイヌ文化博物館 2003. 北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション.	
85	二風谷アイヌ文化博物館	サパンベ (イナウル)	1991612	平取町		平取町立二風谷アイヌ文化博物館 2003. 北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション.	
86	旭川市博物館	礼冠	435	旭川		旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
87	旭川市博物館	礼冠	436	旭川		旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
88	旭川市博物館	礼冠	437	旭川		旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
89	旭川市博物館	礼冠	438	旭川		旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
90	旭川市博物館	礼冠	4111			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
91	旭川市博物館	礼冠	4112			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
92	旭川市博物館	礼冠	4113			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
93	旭川市博物館	礼冠	4114			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
94	旭川市博物館	礼冠	4115			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
95	旭川市博物館	礼冠	4116			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
96	旭川市博物館	礼冠	4117			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
97	旭川市博物館	礼冠	4118	虻田		旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	収集地は有珠か
98	旭川市博物館	礼冠	4119			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
99	旭川市博物館	礼冠	4120			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
100	旭川市博物館	礼冠	4121			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
101	旭川市博物館	礼冠	4122			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
102	旭川市博物館	礼冠	4123			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
103	旭川市博物館	礼冠	4124			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
104	旭川市博物館	礼冠	4125			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
105	旭川市博物館	礼冠	7263			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
106	旭川市博物館	礼冠	7264			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
107	旭川市博物館	礼冠	7390			旭川市博物館 1999. 旭川市博物館所蔵品目録X民族資料/服飾関係.	
108	釧路市立博物館	幣冠	424	札幌市	1938年	北海道教育委員会 1979. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財3) .	片岡コレクション
109	釧路市立博物館	幣冠	425	釧路市	1934年	北海道教育委員会 1979. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財3) .	片岡コレクション
110	浦河町立郷土博物館	冠 (サパンベ)	616	浦河町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
111	浦河町立郷土博物館	冠 (サパンベ)	617	浦河町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	

番号	収蔵施設	登録名称	収蔵番号	収集地	収集年代	文献	備考
112	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	1008	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
113	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	252	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
114	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	254	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
115	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	255	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
116	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	1303	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
117	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	1305	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
118	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	1304	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
119	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	1302	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
120	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	1301	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
121	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	253	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
122	静内町郷土館	冠 (サパパンベ)	1306	静内町		北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
123	穂別町立博物館	頭飾り	1876	記載なし		穂別町立博物館 1989. 穂別町立博物館収蔵資料目録Ⅱ.	
124	穂別町立博物館	頭飾り	2277	記載なし		穂別町立博物館 1989. 穂別町立博物館収蔵資料目録Ⅱ.	
125	豊浦町教育委員会	冠	187	豊浦町	1981年	福田・高橋・古原 2005. 豊浦町所蔵のアイヌ資料.	
126	松前城資料館	冠	CV114			北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005. ピリカ会関係資料の調査研究.	ピリカ会旧蔵
127	松前城資料館	冠	CV115			北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005. ピリカ会関係資料の調査研究.	ピリカ会旧蔵
128	松前城資料館	冠	CV116			北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005. ピリカ会関係資料の調査研究.	ピリカ会旧蔵
129	松前城資料館	冠	CV121			北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005. ピリカ会関係資料の調査研究.	ピリカ会旧蔵
130	松前城資料館	冠	CV122			北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005. ピリカ会関係資料の調査研究.	ピリカ会旧蔵
131	松前城資料館	冠	CV123			北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005. ピリカ会関係資料の調査研究.	ピリカ会旧蔵
132	松前城資料館	冠	CV139			北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005. ピリカ会関係資料の調査研究.	ピリカ会旧蔵
133	松前城資料館	冠	CV140			北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005. ピリカ会関係資料の調査研究.	ピリカ会旧蔵
134	小樽市博物館	冠 (サパパンベ)	3675	三石町	1971年	北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
135	小樽市博物館	冠 (サパパンベ)	3676	三石町	1971年	北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
136	小樽市博物館	冠 (サパパンベ)	3677	三石町	1971年	北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
137	小樽市博物館	冠 (サパパンベ)	3667	三石町	1971年	北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	
138	小樽市博物館	冠 (サパパンベ)	2988	平取町	1960年	北海道教育委員会 1980. アイヌ民族文化財緊急調査報告書 (有形民俗文化財4) .	

Typological Study of Ceremonial Crowns of the Hokkaido Ainu

Taku OSAKA

This study is a typological classification of the ceremonial crowns, mainly used by male Ainu who live in Hokkaido, which were collected between the 1870s and 1940s and are now part of the Hokkaido University Botanical Garden collection. The spatial distribution of each type was also examined. As a result of the analysis, the following types were established.

Typel : Fig2-33852
Typella1 : Fig2-9595,10631
Typella2 : Fig3
Typella4 : Fig4-9599
Typellb2 : Fig4-9596,11242
Typellb3 : Fig4-9596,11247
Typellb5 : Fig5-11246,11244,11248

Of these types, Typella2 was confirmed to be distributed within a narrow scope around the Saru River basin towards Niikappu, and Eniwa. Also, it became clear that Typellb3 was probably distributed around the Funka Bay coast.

The materials in the Hokkaido University Botanical Garden collection do not include materials collected in eastern Hokkaido. The reason for this is the following hypothesis referred to in the results of ethnic group surveys: that is, compared to southwestern Hokkaido, the situations in which they were used were limited in eastern Hokkaido, and there is a possibility that researchers found it harder to acquire samples.